

第 102 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

## 総合病院精神科および大学病院精神科の医療を考える

コーディネーター 渡辺 義文

近年、日本の社会や経済の混乱、顕在化する精神疾患の多様化から、精神科医療に対する社会のニーズが急速に高まりつつある。多様な社会のニーズに対応を迫られているのは精神科病院よりも、総合病院や大学病院の精神科と言わざるをえない。しかし、精神科医療に対する医療経済上の厳しい処遇、卒後臨床研修制度や開業志向に象徴される低賃金・過重労働からの医師離れ、など様々の要因が重なり、総合病院や大学病院の精神科医療は危機に瀕している。このような状況の解決策を模索することを目的に、課題や問題を共有する総合病院精神医学会と精神科講座担当者会議は定期的な合同協議の場を持つことになった。その活動の一環として、総合病院および大学病院精神科の持つ役割や課題、現状の問題分析、その解決の方向性などについて学会員とともに考える場として、本シンポジウムを企画した。

本シンポジウムにおいては総合病院精神科の立場から役割、課題とその打開策について2題（小林孝文氏、藤原修一郎氏）、大学病院精神科の立場から現在施行準備が進みつつある包括払い制度に関する意義、課題、取り組み状況について1題（三國雅彦氏）、臨床研修における臨床研究の意義について1題（染矢俊幸氏）が報告された。小林氏は自らが勤務する総合病院精神科の実態を報告し、その中から、1) 一般医療における役割（コンサルテーション・リエゾン活動、卒後臨床研修

など）、2) 精神科医療における役割（精神科救急、身体合併症医療など）、3) 一般社会における役割（地域精神保健活動など）の3つの役割を整理し、特に精神科救急と身体合併症治療の重要性を指摘している。藤原氏は総合病院精神科が直面している問題として、1) 診療報酬上の不当に低い評価、2) 総合病院勤務の精神科医不足を指摘し、当面の打開策として小林氏も指摘している精神科救急と身体合併症治療の重要性を明確にし、診療報酬上の正当な評価が得られるよう厚生労働省に働きかけることを提言している。三國氏は近年、大学病院を主な対象病院とし、精神科を除く一般科に対して施行されている包括払い制度（DPC）の精神科への導入の意義として、DPC自体の持つ急性期医療の機能向上、透明化、標準化という意義を踏まえつつも、「一般科と精神科との差別をなくす絶好の好機」と解説している。DPC精神科導入準備として精神科講座担当者会議が独自に行った実態調査結果を紹介し、一般科と精神科のDPCが別立てにならないことの重要性を指摘し、当面の課題として現行の身体疾患DPC制度での副傷病名に精神疾患を追加することを提言している。染矢氏は臨床・教育・研究を3つの役割とする大学病院における臨床研修に関し、臨床研究を行うことの有用性について教室員の意識調査結果を踏まえて解説している。なかでも研究を通じて診断・治療に対する知識・理解や態度が深まり、

臨床能力が高まることを強調している。

本シンポジウムを通して、入院中心から外来そして地域中心の医療へと変貌をとげつつある精神科医療における総合病院や大学病院精神科の果たすべき役割が明確となり、さらにその高まるニ-

ズとは逆行する医療制度上の問題点も浮き彫りにすることができた。果たすべき役割を着実に遂行する重要性を認識できたことと、問題点に対する具体的な打開策がいくつか提案されたことが本シンポジウムの意義であったと思われる。

---